

が少なくなかった。米国で出版されたウォーマンのジャーマン・ブックは副題に「自然的またはペスタロッチ的方法による」とあるように、自然や動植物を扱った絵入りの読章が収められていて、幼年学校生が学ぶにふさわしい健全な読本だった。当時ドイツ語界の三太郎として知られた大村・山口・谷口編の独文読本も道徳的価値を有する事績を扱った詩文を収めていて、生徒はこれによってドイツ語を学ぶと同時に徳性を涵養することができた。シェーフェル文典は明治10年代から20年代にかけて諸学校で広く用いられたが、30年頃は英文の教科書が主流になっていた。だが陸幼生は英語を未習だったので、なおシェーフェル文典を用いたのだろう。

1899年（明治32）4月25日発行『独逸語学雑誌』は熊幼生の米村及び是永両君の独作文を掲載し「同校は設立以来日尚浅きにも拘らず生徒の独乙語に於る進歩の著しきを見るに足るべし」と記している。紙幅の都合でそれをここに引用できないのは残念である。素より誤りも少ないが、熊幼のドイツ語教育が相当成果をあげたのは確かである。なお、熊幼生の多くは卒業後、中央幼年学校において更に2年間ドイツ語を勉強したので、その卒業生は一層高度な語学力を備えていたと判断される。

独語担当教官には陸軍教授として川室圭吾、中台重躬（なかだい・しげみ）、助教として松島誠明らがいた。

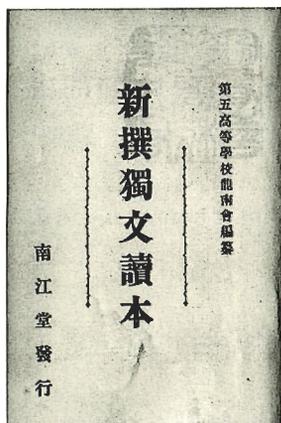
川室は東大医学部予科出身の独語学者で、熊幼初代の独語教授を務めたが、まもなく中央幼年学校へ転任になった。『学生必携独和教場会話』（明治37）やリーダー Freund in Sommerferien（同42）などの著作もあり、初期陸幼のドイツ語教育において最も功績のあった人だ。中台は最初長崎の第五高等学校医学部の嘱託講師のち助教授としてドイツ語を教えていたが、川室の後任として熊幼に迎えられた。彼にも『独逸作文早わかり』（明治33）という入門書がある。鷗外の日記には彼の名前がしばしば登場するので、二人は交友があったらしい。松島は旧東京外国語学校を経て独逸学協会学校専修科を明治28年に卒業、熊幼の開設と同時に助教として勤務し、大正3年頃までその地位にあった。

これらの教師に導かれながら、純粹で、凛々しい熊幼生たちが熱心にアー、ベー、ツェーを唱えていた姿はいじらしく、また尊い。一般的に陸幼のドイツ語教育は、語学教育としては成功したと言えよう。またそれは我が国ドイツ語教育史上特異な位置を占めている。だが軍事史家も指摘するように、問題も内在していた。初期の陸幼で課した外国語は独、仏、露の三カ国語で、英語と中国語は中学校から士官学校に入った者が専ら修得した。他方、軍事研究のため留学した将校の中では、陸軍大学校卒業時の成績の関係上、幼年学校出身の方がずっと多かった。そして独仏ソ留学将校は帰国後多く重要な地位に就いたが、米英留学組にはそれが少なかった。このことが結局、陸軍上層部の対米英認識を貧弱なものにした主要な原因となった。

第五高等学校龍南会編纂『新撰独文読本』

明治期の独語読本ではヘステルス、ボック、エンゲリンなどのドイツ製のものと英国製のプフハイム独逸新読本が主流を占め、広く用いられた。だが、明治後期にはそれを潔しとせず日

本人の手になるものも現れた。その代表が独語界の三太郎と云われた大村仁太郎・山口小太郎・谷口秀太郎共編の『独文読本』（全三冊）と『高等独逸読本』（全二冊）である。



新撰独文読本

また、有力な私学（塾）や旧制高校でもその校独自のリーダーを編纂することが見られた。前者の代表例として東京の本郷にあった私立独逸語学校の教師たち（高橋金一郎、藤代禎補ほか）が編纂した『独逸読本』（全二冊、独逸語学校蔵版）が挙げられ、後者には第一高等学校独逸文学科教員撰定『独逸語読本』（全二冊、南江堂）がある。いずれも初版は1895年（明治28）に出ている。これらの読本に刺激されて出版されたと見られるのが、第五高等学校龍南会編纂『新撰独文読本』（明治31年4月5日発行）である。単に龍南会読本とも呼ばれた。全一冊。B6変形。本文172頁。目次4頁。正価35銭。表紙には黒と緑のまだら模様ハードカバーを用い、背は黒色布装。序文や後書きの類は一切ない。奥付を見ると、編纂者・余田司馬人（熊本県飽託郡黒髪村大字坪井七百七十五番地）、発行所・

南江堂（東京市本郷区湯島切通坂町八番地）とあり、発行者は小立鉦四郎（南江堂書店主）である。南江堂は医学書とドイツ語学書の出版で知られていた。編纂者の余田は熊本洋学校の出身者で、化学を専門とする助教授であるが、同時に五高の校友会である龍南会の書記を務めていた。（ちなみに「龍南会会則」には「本会ハ第五高等中学校職員生徒及ビ本校ニ縁故アルモノヲ以テ組織シ相共ニ智徳ヲ磨キ身体ヲ練リ交誼ノ親密ヲ計ルヲ以テ目的トス」とある。）だが、余田が単独で編纂に当たったとは考えにくく、やはり当時の五高の独語教師たち（賀来熊次郎、岩田静夫、久後元長、上田整次、二宮哲三など）に協力を仰いでまとめたものであろう。とはいえ実際に彼らが文章を書いたわけではなく、ドイツの読本から材料を採ったものである。こうした編纂法は、この龍南会読本に限らず、当時の読本の一般的特徴である。そのため収められた読章は重複するものが多い。

全部で144編の読章を収めている。各頁に脚注がある。内容的には当時の読本の一般的傾向である教訓的色彩を帯びたもので、親孝行や忠君愛国、歴史上の人物の逸話、或いは自然や動物を扱った読み物が多い。参考のために、冒頭に置かれた「汝は汝の父母を尊まうべきである」と題する一編を紹介しよう。

1. Du sollst deinen Vater und deine Mutter ehren.

Eine arme Bauernwitwe hatte ihren Sohn mit Spinnen ernährt und es sich sauer lassen,¹ um ihn auf der Schule zu erhalten. Dieser Sohn kam in der Welt² sehr hoch hinauf. Einst gab er ein Gastmahl. Als die Gäste sich versammelten, wurden sie zwei Dinge gewahr,³ über welche sie sich wunderten. Unter einem prächtigen Spiegel hing ein ganz geringer Knotenstock. Sodann stand ganz oben an der Tafel ein alter Stuhl mit hoher Lehne und neuem Überzug. Man fragte den Herrn des Hauses, was das bedeute. Er antwortete: „Ich hatte nichts, als diesen

Stab, als ich aus meiner Mutter Hause ging. Der Stuhl aber ist meiner lieben Mutter Spinnstuhl gewesen, an welchem sie so viel gearbeitet hat, daß ich auf der Schule leben konnte.” – Als nun die Gäste alle beisammen waren, bat er dieselben, das er noch einen fehlenden Gast holen dürfe. Siehe, da kommt er schon zurück ; und an seinem Arme führt er ein gekrümmtes, altes Mütterchen in Bauertracht und setzt es auf den Spinnstuhl obenan.? Es war seine Mutter, die er also ehrte.

1. es sich sauer werden lassen, 辛苦スル。 – 2. in der Welt hinaufkommen, 立身スル。 – 3. gewahr werden, 視ル。

先へ進むにつれ次第に難度が高くなり、文も長くなっている。初級後期から中級程度ぐらいと云って良からうか。

歴史上の人物を扱ったものとしては「ヴィルヘルム一世王の勇猛」「野戦病院における皇帝ヴィルヘルム」「フリードリッヒ大王と街の悪童たち」「フリードリッヒ2世と小姓」など相当に多い。これは、明治初期・中期に独語教科書として用いられたヴェルテル万国史が、もはや30年頃にはもう用いられなくなったので、それを少しでも補う意味があったのではあるまいか。

だが、この龍南会読本はあまり用いられなかったようだ。初版だけで、重版は出なかったことでも分かる。五高記念館に明治30年代の「第五高等学校大学予科教科用書目」という、各年ごとの使用教科書を記した資料が保存されているが、それを見ると、ごく稀にしか使われていない。それでもこの読本が出版された直後、1898年（明治31）8月に五高から三高に転勤になった賀来熊次郎は、「第三高等学校独逸語細目」（明治33年4月15日発行『独逸語学雑誌』）によると、一年医科生に対して用いており、ほかに同僚で、旧知の大井和久（賀来と大井は共に以前、警官練習所の訳官を務めた）も一年法・文科生に対して用いた。だが、これはむしろ例外的であった。そういうわけで明治42年3月号『独逸語学雑誌』掲載の「各高等学校独逸語教科書」を見ても、龍南会読本を採用しているところは五高を含め一校もない。

龍南会読本が用いられることが少なかったのは、内容が時代に合わなくなっていたことが考えられる。もし明治10年代ないし20年代だったら、もっと用いられたであろう。この読本が出た明治30年代になると、五高生はより高度で、より文学的なもの、思想的なものを求めるようになっていたのである。

それでも語学教科書として見た場合、この読本を、辞書を用いて一編一ぺん丹念に訳して行けば、相当な読解力が養成されることは間違いない。

放浪の日本学者 A・グラマツキー

アウグスト・グラマツキー（August Gramatzky）といっても、今では彼のことを知る人は殆どいないのではあるまいか。彼は明治から大正にかけて山口や鹿児島高等学校等で独語教